

河内道明寺天満宮梅花祭

二月二十五日(日)道明寺天神祭に大阪琵琶同好会が協賛して昼一時から例年通り左記献奏して多数の参拝者を喜ばせた。因みに道明寺は大阪夏の陣に於て東西両軍が対峙した史蹟として有名である。青葉の笛一馬部、管公一、米原、荒城月夜の曲一別所鶴美、鈴木木鶴、青柳鶴子、湊川一多和、井伊大老一作花旭友、五条橋一辻旭城、姫ゆりの塔一石橋旭嶺、二〇三高地一奥村旭美、木村重成一田中款水、外に詩吟、剣舞、浪曲など数番。

京都琵琶協会三月定例会

三月四日(日)昼一時本部平井会長宅。水内姫水一西郷隆盛、馬場鴨水一河内の宿、牧南水一本能寺、山岡旭清一伊豆の御難、平井春嶺一さくら各演奏の外楊嶽水、梅原旭濤、安住旭康、荒木旭媛、植村寛水の諸氏出席。来たる五月二十七日協会主催予定の春の演奏会は「京絃」三〇〇号記念演奏会を京絃社が主催し協会が全面的に後援して開催することに變更、その他二、三の協議をして夕食を共にし七時散会した。

入江岳秋氏追悼演奏会

三月十一日(日)午前十一時名古屋中小企業福祉会館、主催前田秋声氏。花売翁一会主前田秋声、七卿落一小沢、菅公一兵藤、月下の陣一鬼頭、桜狩一山本、太田道灌一山田秋峰、紅葉狩一久保田秋鳳、川中島一長谷川秋楓

錦びわ春の会

三月十一日(日)昼二時東京新宿洲鳳会館、主催錦びわ本部。静幻想曲一桜柳、桜苑、故郷の道一漆畑、青葉の笛一上田、白虎隊一小川、春秋譜一水井、平田、扇の的一三箇、うつぼ猿一原桜光、大高原吾一綱野桜苑、しぐれ曾我一箕村桜州、耳なし芳一、斎藤桜玲、源実朝一木原綾子、盲目景清一水藤五郎。

ラヂオ琵琶放送

三月八日(日)午後三時十分NHK・FM。筑前「大楠公」一藤巻旭鴻、錦心流「竜の口」一中谷裏水両氏放送。

予 告

●京都琵琶協会四月定例会 四月八日(日)昼一時本部平井会長宅。 ●京都醍醐寺桜祭奉納演奏会 四月十五日(日)昼一時(晴雨不問)主

催大阪琵琶同好会。

●日本琵琶楽協会関西支部第二回名流会 五月六日(日)朝十時半大阪南区なんば高島屋ロイズ劇場(千五百円) ●錦心流一水会中部、関西、北陸各支部親善演奏会 五月二十日(日)正午富山市山王町日枝会館 主催一水会富山支部。 ●京絃三〇〇号記念演奏会 五月二十七日(日)正午京都東山安井金比羅会館 主催京絃社 後援京都琵琶協会。

●奈良二月堂のお水とり行事が終ると琵琶湖畔の比良八荒、これが済むと京阪神に春が来ることになっていく。今年には珍しい暖冬で暖かい二月が過ぎ戻り寒波の三月も僅か数日で済んだ。このまま春が来れば結構だが雪が少なかったので夏の水不足がそろそろ心配になる。別掲掲載の通り京絃は六月号を以て三〇〇号を迎える。昭和二十九年に第一号を創刊してから四半世紀、二十五年になる。先輩、絃友、同好諸氏の御鞭撻御支援により毎月一回も休まずに発行を続けることが出来たのを心から感謝する。どうぞ今後ともよろしく。

昭和五十四年四月一日発行(非売品) 編集者 植村 真 水 発行所 京 絃 社 高槻市津之江北町一ノ二 電話〇七二六(三三六〇五)番

琵琶 機関紙

京

絃

第二九八号 京 絃 社

琵琶 (七)

忘れられんとする音の世界

村山道宣

肥後琵琶(上)

肥後琵琶師の山鹿さん

まだ強い日射しの残る、夏も残り近くあった或る日、私は熊本県の北端にあり、筑後平野にも程近い玉名郡南関町小原に住む琵琶師・山鹿良之さんを訪ねた。明治三十四年、同地の農家に生まれ、今年七十六才になる山鹿さんは、私に修行時代の話や門弾きの折の話など数々の思い出話をしてくれた。

山鹿さんは二十二歳の時(大正十一年)天草郡本村の琵琶師、江崎初太郎の許に弟子入りし、琵琶や語り物を住み込みで習うようになった。師匠の初太郎さんは最初は石屋をしていたそうである。そして、三池炭坑で縦坑掘りをしていた時、ダイナマイトの爆発事故に会い失明し、その後、肥後琵琶、玉川流の創始者である堀氏(芸名玉川教順)について琵琶を習い、琵琶師としての生活を営むよ

うになったという。初太郎さんには、山鹿さんの他、数人の弟子が有った。修行は琵琶の弾法、次に端唄を教わり、最後に段物を習った。琵琶は一年程習っただけでそれから後は一人で練習した。段物を修得するには先づ、外題の文句を師匠の云う通り繰り返し空読みして覚え、次に琵琶を入れて語ってみる。このようにして習い憶えた外題は、都合戦筑紫下り、「菊池くずれ」、「更級武勇伝」、「尾張騒動」、「餅酒合戦」などであった。山鹿さんは、師匠のもとで三年程修行した後、郷里へ戻って来た。以来、山鹿さんの琵琶師としての生活が始まることになるのである。

ところで、山鹿さんが琵琶師になったそもそのきつかけというものは、どのようなことだったのだろうか。私が尋ねると山鹿さんは当時のいきさつを話してくれた。

おとうさんは、目の不自由な山鹿さんのことが、気掛かりだったのであろう。「おれが元氣なうちに自力で生活して行くための技術を早く何か身につけるよ。」といつも口癖のように云っていた。鍼灸者になることを勧め人もあったが、山鹿さんは、その気になれなかった。「その時分までは鍼灸も現在のようには発展しちやあらんし、村内に鍼灸をする者が一人おったけん、客が来らんとすた。鍼灸じゃ商売にならんもんじゃけん。」山鹿さんは浪花節語りになろうかと云い出したこともあった。するとおじいさんは「絶対、だめばい」と大声で山鹿さんを叱りつけた。浪花節語りになれば各地を巡回して廻らなければならず、互に連絡を取り合うことも出来ない。万が一、ことがあった時にはどうするんだ、とおじいさんは云うのであった。

けれども山鹿さんのおじいさんは浄瑠璃が大変好きであった。じいさんは門付けの浄瑠璃語りさんが来ると、「家に泊まんははりませ」と云っては浄瑠璃語りさんを引き止め、夜になると近所のじいさん、ばあさんを集めて浄瑠璃を聞いたものであった。その折りに「おじいさんが、浄瑠璃語りさんの前座を勤めたこともあった。おじいさんは山鹿さんに「浪花節より浄瑠璃の方が良かばってんが、若かもの好かんけんねえ/浄瑠璃語りになっても、これから先聞き手がなまきやどうにもならんばってん...。どうせなら琵琶ば習

え。まだ間違いはなかけん。」と云って琵琶師になることを勧めたのであった。こうして山鹿さんは、琵琶師としての道を選んだのである。

この話の背景には、その当時、熊本やその周辺で肥後琵琶が盛んであったということがあるであろうが、私にはもう一つ別なものがあのように思われるのである。肥後の琵琶師の間には琵琶を弾き、段物を語るといった芸の他に、盲僧の人達が行う「釜破い」や「わたまし」(家の新築の際に行われる固めの神事)と云った宗教的な諸行が伝統としてあったのである。「芸は廃れても破いがある」というような想いが、おじいさんの頭の隅のどこかにあり、山鹿さんに琵琶師になることを勧めたのではないだろうか。また、当時(大正末期)の熊本の農村に於いては、盲人によって按摩や鍼灸者としての生活よりも、芸能者としての生活の方が、より身近であり容易だったであろう。

山鹿さんは天草から帰った後、初太郎さんに習った外題が少なかったこともあり、同じ玉川流の琵琶師であった三池の森与一氏について一年程、門弾きして歩いた。森氏からは「一の谷」「小教盛」「あぜかけ姫」「俊徳丸」「小栗判官」「山中鹿之助身方集め」などを習った。その後、山鹿さんは独りで門弾きして歩くようになるが、ここで山鹿さんが、初めて独りで遠方に門弾きに行った折りの話を紹介してみよう。



「壇の浦」後記(下) 安田元久

鎌倉へ下った一行は、五月十五日相模の酒匂駅に着いた。そこへ北條時政が鎌倉から出向して宗盛父子を迎え取り、翌十六日に鎌倉にはいった。「吾妻鏡」によれば、このとき、見物の人々が群がるどころへ、宗盛は輿を用い、清宗は馬に乗って、数人の騎馬武者につき添われて姿をあらわした。そして若宮大路を経て横大路に至り、幕府にはいつてその西対が居所にあてられた。宗盛は既に死罪と決していたためか、出された食事にも手をつけず涙ぐんでいるばかりであったという。

やがて六月七日になって、近く宗盛を送り返すこととなったので、頼朝は簾を隔てて囚人の宗盛と対面した。宗盛は御家人たちの居並ぶ西侍に引き出されたが、卑屈な態度で、「命さえ助ければ出家して仏道を求めたい」と、助命のみを願う様子を示した。「吾妻鏡」には、武門に生まれながらこの期に及んでなお卑怯未練な態度の宗盛に、痛烈な批判をしているが、宗盛のこの態度が果たして事実であったか否かは判らない。しかし「吾妻鏡」に於ける宗盛は、もう一人の平氏の囚人重衡

と鋭い対比を見せる。

宗盛が囚虜の身として鎌倉に下ったとき、そこには平重衡が同じく捕虜として置かれていた。重衡は宗盛と同母の末弟である。彼は早く一の谷の合戦で梶原景季らのために捕えられ、一一八四年(元暦一)二月九日、土肥実平に護衛されて京都にはいり禁固された。平家一門のうちで最初に捕虜となったのであるが、戦場で自害するひまもなかったか、或いは逃れ去るひまもなかったのか、更には何事かを期して故意に捕われたか、その何れかは容易に判断できない。京都の重衡は、囚虜の身ながら和平工作の提案をし、後白河法皇も一度は重衡の申請を受け入れて実行したほどである。重衡は、和平への積極的意志を持ち、その実現のために故意に捕われて、京都に帰る機会を作ったものと見られるのである。

しかしこの和平提案は実らず、重衡の期待は全くはげられ、彼にとっては最早明日の生命も知れぬ虞因の生活が始まった。そして同年二月十日重衡は頼朝の申請で、鎌倉に送られることになった。「吾妻鏡」では、頼朝に対面した重衡は毅然たる態度で、一日も早く斬罪に処せられんことを、少しも憚ることなく云い放ち、これを聞く者総てがその潔きよさ態度に感じ入ったという。そして重衡は狩野介宗茂に召し預けられたが、その後も頼朝には重衡を斬罪にする意志はなく、寧ろその武勇剛毅に感じ慰めていた。しかし重衡は仇敵の情にすぎることを嫌い、飽く迄も死意を

貫いたようで、「吾妻鏡」には重衡の人物を称揚し、彼を非難する記事は見当たらない。

こうして約一年が経過した頃、壇の浦での平氏一門の族滅、そして宗盛父子の鎌倉護送ということとなる。重衡助命の時期を待っていたとすら見られる頼朝も、囚人としての重衡と宗盛とを区別すべき理由を見出すことが出来なくなかった。加うるに、南都東大寺の衆徒たちからは、さきの南都焼打ちの張本人としての重衡の処罪を求める声が高まり、頼朝の政事的立場からも、重衡の庇護を断念せざるを得なくなり、元暦二年六月九日源頼兼に護送されて西に送還のため鎌倉を離れた。

同日、宗盛父子も義経と共に京都に帰されることとなり橋公長、浅羽宗信らに護られて西に向った。そして六月二十一日近江国篠原宿に着いたが、ここで宗盛父子は誅殺され、二十三日晩、父子の首は検非違使庁に渡され獄門にかけられた。一方重衡は二十二日に東大寺衆徒の手に渡されて、二十三日泉木津で斬られ、その首は奈良坂に懸けられた。

平家一門の主流宗盛父子、重衡を始め一族全滅のあとまでも、消息不明の者もある。たとえば、重盛の嫡子維盛は、屋島合戦以前に三十艘程を率いて南海に去ったという風聞を残したまま行方を消した。「平家物語」では、従者二人と共に高野山にはいり、滝口入道(もと重盛の侍齊藤時頼)の導きで出家し、のちに滝口入道と共に熊野に参詣して那智の沖に入水して果てたとも云われる。

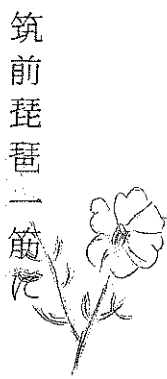
維盛の弟丹後侍従忠房は、史実としてその行動がやや明らかである。忠房は屋島の戦場を逃れて、紀伊の豪族湯浅宗重を頼った。宗重一族は之を守護し、熊野別当以下の源氏軍に対して三ヶ月も抗戦したといわれる。しかし頼朝が文覚上人を使者として湯浅宗重を懐柔したため、結局忠房の身柄を差し出した。元暦二年改元文治元年秋の頃と思われる。忠房は十二月後藤基清に預けられたが、その後このことは分らない。

この十一月から十二月にかけて、京都では北条時政が平家遺族探索を強化した。まづ宗盛の幼児二人と通盛の子息が殺された。同じ頃維盛の長子六代御前が捕えられたが、文覚上人の助命運動で上人のもとで出家し妙覚と名乗り、一一九四年(建久五)には、鎌倉に行つて頼朝に対面した。しかし、後に文覚が幕府と対立したため、妙覚も斬られたという。更に重盛の末子宗実が、左大臣藤原経宗の嫡子で一旦は捕えられたが、経宗の懇請によつて死を免れている。

言(40)

後 寛

平安末期、仁和寺寺執行。藤原成親、成経父子や平康頼らと後白河法皇を擁して平清盛を亡ぼそうと企てたが失敗して鬼界ヶ島に流され、後ただ一人島に残されて治承二年(一一八七)歿した。



筑前琵琶一筋 高槻市の山崎旭萃さん

奈良時代に中国から伝来したという東洋の弦楽器「琵琶」。数多くの種類がありましたが、明治中期から大正にかけて隆盛をきわめた「筑前琵琶」もそのひとつ。十一歳から筑前琵琶を習いはじめ、以来六十余年、その奥儀を極めることに専念し、昭和五十年には文部大臣賞などを受賞した山崎旭萃さん。高槻市宮田町。72歳を訪ねて、いろいろと話を聞いてみました。

ご自宅のブザーを恐る恐る押すと、迎えて下さった旭萃さんはふっくらとしたやさしそうなおばあちゃん。通された和室には大小さまざまなナス形の琵琶が六丁ずらり。初めて目の前で見ると、色、形、大きさ、何もかもが珍しいのは当然ですが、度肝をぬかれたのは、低くて深みのある旭萃さんの語りとバチさばき、あざやかな演奏です。心の底にしみわたるような何ともいえない余韻をおびた音。弾きながらの語りは義経、弁慶の伝説で有名な「安宅」。花を見捨てて行く雁の：花なき里に急ぐ

らん：友呼び交し旅衣：露けき袖をしをりつ

「昔私が習ったころのように琵琶が隆盛になつてもらわぬ死ねません。後継者をつくらなあかん、そればかり思うてますねん」と旭萃さんはしみじみと語ります。

琵琶の再興と後進の指導へ傾ける情熱が認められて、五十年に芸術選奨・文部大臣賞、大阪文化祭賞を受賞。そのとき、吉田前高槻市長がじきじき自宅に花束を持ってお祝に來てくださり感激したそうです。

旭萃さんは明治三十九年三月五日、大阪西区の江の子島というところで、イヌの製造元、次女として生まれました。琵琶は十一歳のときから。「私はからだ弱かつたんで、おなかから声を出すもんじゃないこと、始めたんです。その頃は無声映画がはやってましてね、弁士が「あわれなるかな：何とかかんとか」という可愛そな場面になると哀愁を帯びた琵琶の音が入りますねん。私は映画を見に行つては弁士のまねをしたもんです。まあ、両親が遊芸好きやつたんで、親の楽しみでもあったんでしようね」となつかしげに当時をふり返ります。結婚後間もない十九歳で、筑前琵琶橋会の宗家橋旭宗先生の直門となり、昭和四十二年に先生が亡くなった後は、宗範として宗家を補佐されています。

「琵琶はできへんし、それから私の難儀が始まるんですわ」と話して下さったのが戦争中のこと。二十年三月十三日の大阪大空襲で、

愛用の琵琶六丁が焼け、一丁だけ持つて御主人の郷里鹿兒島へ疎開。「百姓はせんならんし、姑につかえんならんし……」でも、何よりもつらかつたのは琵琶が出来ない生活。

まもなく、琵琶を持つて村の学校を回る機会に恵まれました。「あちこちの学校から来てくれ云われまして、それが嬉しいね、里の道を琵琶をかついて歩くのも苦にならんかつた」とボツリ。そのとき、しっかりと持ち歩いた琵琶を今も愛用されているとか。

大阪へ戻つて來たのは三十六年、それから指導にあたるかたわら、筑前琵琶の代表者として、あらゆる古典の演奏会に出演するなど琵琶の再興に懸命の毎日。住まいもあちこちを転々とし、高槻市津之江に落ち着いたのは四十四年八月。(宮田町へ移られたのは昨年十一月)。現在、お弟子さんは北海道から九州まで六十数人。その殆んどが年輩の女性だとか。でも孫弟子には四歳、七歳のチビッ子もいる由。地元高槻では只一人のお弟子竹田あさのさん68歳は、難かしいけど老後の楽しみ、とおっしゃっていました。

旭萃さんは、お弟子が全国にちらばつていたので、いま北へ南へと忙がしい日々です。でも「琵琶がもつと盛んになるように今後には地元高槻でも小さな茶話会みたいなものもさして貰わなあかん思うてますのんや」と話しておられました。

琵琶は古代琵琶(雅楽)、荒神琵琶(地

神、盲僧)、平家琵琶(平曲)、近世琵琶(薩摩、筑前)に分かれる。筑前琵琶は荒神琵琶をもとにし、薩摩琵琶を参考に始められたもので、流派には旭会と橋会がある。三味線音楽に近づいているところはその特色があり、調弦も三味線の本調子からとる。構えは斜め。胴の表板が桐であるため柔らかい音を出す。弦は絹製で五本。主として昔の歴史物語を語りながら演奏される。値段は一丁五十万円。安価なもので二十万円。サンケイリビンダから転載！

安政の大獄

ばくすい



内外の物情騒然たる中に、安政五年四月二十三日、彦根藩主三十五万石の井伊直弼が大老職に就いて徳川幕府の実権を一手におさめ、六月十九日日米修好通商條約に勅許を待たずに調印せしめたのを手始めに、現役の堀田、松平両老中を罷免して、部下の間部、太田、松平乗全の三人を新たに老中とし、自己の陣容を整えるなど、井伊に反対する者は悉く処分した。

安政五年九月七日、京都に於て梅田雲濱を捕えて後獄死せしめ、その他六年十二月まで

に多くの有能の士が投獄断罪された。切腹は水戸家老安島帯刀、死罪は吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎等、その他獄門、遠島、追放等多数の人々を失った。

処分の手は朝廷にも延びて、鷹司太閤、近衛左大臣、鷹司右大臣、三條前内大臣、一條内大臣、二條大納言ら、或いは辞職或いは謹慎。大名では土佐の山内豊信、宇和島の伊達宗城等が隠居謹慎を命ぜられ、幕府役人では岩瀬、永井、浅野、鶴飼らが蟄居または隠居謹慎処分を受けた。これらを総括して「安政の大獄」という。

安政の大獄はあらゆる方面に対して苛酷であったが、幕府の憎しみの最も深く、その圧迫の最も強かつたのは水戸に対してであった。これに激発された水戸の志士は、ひそかに連絡して時機をうかがい、万延元年(一八六〇)三月三日の朝、降りしきる雪の中を登城する井伊大老を桜田門外に要撃して、激闘の中に大老を斬りその首を挙げた。攻撃したのは関鉄之丞以下水戸浪士十七名と、薩摩の浪士有村治左衛門。彦根藩士六十人もよく防戦したが、戦闘は一瞬にして終った。

井伊大老の死の影響は甚大で、安政大獄以前には国を憂うる人々も大抵は徳川幕府を助け、之を改革することを考えたのであるが、安政大獄によって徳川幕府を倒さなければ、と考えるようになった。水野筑後守が「吉田松陰、橋本左内の殺されたる一事、以て徳川氏を亡ぼすに足る。」と云つたのは、その一

京絃300号記念演奏会

時 五月二十七日(日)正午一五時
所 安井金比羅宮会館
京都市東山区東大路松原上ル
(市バス)東山線清水坂下車
一〇〇米上ル
琵琶各流派演奏大会予告
主催 京絃社
後援 京都琵琶協会
○東西の名手四氏賛助出演
(薩摩系二師・筑前系二師)

例である。

安政の大獄に犠牲となった人々、何れも惜しむべく痛ましい中に、とりわけ惜しい人物、その死がわが国の大きな損失と考えられるのは吉田松陰と橋本景岳(通称左内)である。松陰は天保元年長州萩の郊外松本村に生まれた。父は藩士杉百合之助、松陰はその次男であるが、叔父の養子となって吉田家を継いだ。吉田家は代々山鹿素行の兵学を伝えて毛利藩に仕えていた。松陰も兵学を継ぎ厳しく教えを受けていたが、嘉永四年二十二歳の春、兵学研究のため江戸へ上る途中、湊川に楠公の墓を拝して感激に堪えず、誓って斯の賊と共に生きず

嗚呼忠臣楠氏の墓

吾暫らくためらいて行くに忍びず云々という詩を作った。然るにその年には大きな感動が待っていた。それは水戸である。松陰は二十二歳暮れから翌春まで約一ヶ月間水戸に滞在し、会沢正志斎、豊田天功等の大家に会って義公以来の学風に触れ「身、皇国に生を享けて皇国の皇國たる所以を知らず、何を以て天地に立たむ。」と絶叫した。つまり今までは、日本に生まれた以上、自分は日本人だと思っていたが、一とたび水戸の学風に触れて、日本国家の本質を全然理解していなかった事が分った。水戸学が日本人としての自覚を促して、明治維新に貢献した因をなしたのである。

水戸で日本の国体に自覚めた松陰は、それから東北地方に旅行し、その際佐渡へ渡って順徳天皇の御陵を拝し、逆賊のためにかかる辺鄙な島へ流された御不幸に泣き、正しい学問を興して道徳を明かにし、風教を正さなければ、と痛感した。やがて嘉永六年六月、ペリリが浦賀へ來た。松陰は直ぐ浦賀へ行き状況を視察して、我国には海外の情勢を知る者なく、また外国に對抗する武力もない事を歎き、西洋兵学の師佐久間象山に相談して、ひそかに海外に渡る計画を立て、七月ロシアのプチャーチンが長崎へ來るや、松陰は之に便乗するため直ぐ出かけたが、長崎に來てみるとロシアの軍艦は既に出航したあとで、止むなく江戸に帰った。

安政元年、また来朝したペリを伊豆の下田に訪づれ、軍艦に便乗を頼んだが、幕府の許可が無ければと断った。その間に松陰の乗って来た小舟は、松陰の刀や荷物を乗せたまま何れかへ流れ去ってしまったので、米艦のボートで送りかえされた松陰は、やむなく自首して出て獄に投ぜられた。十日程の獄中生活に「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以」を昼夜絶叫し、獄卒はこれを聴いて泣いて感動したという。

やがて江戸の獄から萩の野山の獄に移されたあと一旦許されて出獄、生家杉家で禁固謹慎中に講孟割記を完成した。

有名な松下村塾は叔父の経営を受け継いで内容を充実したもので、久坂玄瑞、高杉晋作、前原一誠、伊藤博文、山県有朋、品川弥二郎等、明治維新の功労者を沢山輩出したが、安政六年五月再び捕えられ、十月二十七日江戸伝馬町の獄に於て死刑に処せられた。歳三十。



英雄信長・秀吉も手を焼いた

根来衆鉄砲隊の活躍

辻 旭城

和歌山県岩出駅で下車して徒歩十数分、新義真言宗根来寺(ねころじ)に到着。
根来寺は葛城連峰の麓にある。平安の頃か

ら中世紀にわたり、紀州路は信仰のメッカであった。熊野詣や高野山など山深いながらも畿内に近いことなどで早くから開け、大きな寺院の多い土地であった。

根来寺に来てみると、塔や小堂のかげかげが、濃緑の松や杉の大樹の間から見える。また広大な境内には桜樹や楓が沢山植え込まれ、花や紅葉の季節には美しいことだろう。

縁起によると正応元年(一二八八)、高野山中にあった小伝院を根来に移し、仏教をひろめたところ寺運は次第に栄え、寺領七十二万石、二千七百にも余る僧坊があったという。

また叡山の僧兵と共に、根来の僧兵も勇猛で全国的に有名だったが、天正十三年(一五八五)豊臣秀吉の攻撃によって建造物の大半は焼失して、現在僅か大師堂と多宝塔などを残すのみとなっている。

参詣を済ませて道筋の茶店に立寄り、餅を喰べながら老婆の話聞いた。

「秀吉公の根来攻めで寺も何も彼も焼かれたそう、仏さんを焼討ちしたため天下は長く続かず、これも仏罰でしょう。しかし昭和二十一年十二月に根来寺と改められ、大門をはじめ数多のお堂が出来ました。」

秀吉の根来攻めの後、この地方に伝わる子守唄にも、哀調をおびた節廻しがひそみ、戦いに敗れた哀れさを物語っている。

「ねんね根来のお寺は焼かれ、ぼんさん可愛想に丸焼けて。」

「ねんね根来の覚饒山で、年寄り来いの鳩が鳴く。」

二句目の唄について、僧兵たちは徳川家康に援軍を要請したが、来てくれなかったことを悔み「年寄り」は家康で、「鳩が鳴く」のは僧兵の嘆きを唄ったものといわれている。

根来寺といえば、古くから伝えられ、忘れられないのが根来塗と鉄砲の伝来である。

尾張の一小豪族から興った織田信長が次第に勢力を拡め、天下統一の覇業を推し進めて、その大望の半ば以上を達成したのは、もとよりその剛勇胆力と勝れた智略によるところであるが、特に彼は、どの戦国武将よりも大砲の威力を認め、兵器としての鉄砲戦略に思いを致し、これまでの騎馬将士や徒士侍たち個個の戦に寄っていた戦法を捨てて、鉄砲足輕を中心戦力とする集団的戦法に切り替えた。

しかし戦国時代の、鉄砲戦術と強大な戦闘力を以て、逐次天下制覇の偉業を貫徹しつつあった信長にも、その生存中にどうしても討滅できなかった大強敵があった。

それは紀州根来の強力な一党で、根来衆たちの信長軍団よりも更に勝れた鉄砲戦力を持つ戦勇の衆徒、即ち僧兵であった。

根来の僧兵たちは、信長よりも早くから鉄砲を取り入れ、その操作や射術には熟達した強豪揃いで、しかも鉄砲や玉火薬に至るまで総て一党で製造し、補給のできる強力な軍団であった。

元龜元年(一五七〇)信長は、石山本願寺を大軍をもって攻めたが、本願寺に味方する

雑賀、根来連合軍の鉄砲隊から三千挺の鉄砲で猛射を浴びせられ、甚大な被害を受けて惨敗、第一次石山合戦は織田軍の失敗に帰した。

そもそも根来衆(僧兵)は、津田監物を始祖とする津田流砲術に巧みで、鉄砲にかけては百発百中といわれた。津田監物は、河内国交野郡津田城主津田周防守正信の長男で、名を算長といひ紀州小倉荘を領し、根来寺の有力者杉の坊明算の兄だと伝えられる。こうした関係で監物は、根来衆の指揮者、いな支配者であった。しかし信長のあとを受けた秀吉の心を騒がせ、やがて天正十三年、紀州を火の渦の中に捲き込んだのである。

花も蕾の白虎隊

野村俊夫作詞

一演奏時間八分

戦雲暗く風絶えて

孤城に牙ゆる月の影

たが吹く笛ぞ音も悲し今宵名残りの白虎隊

紅顔可憐の美少年 死をもて守るこの山河

滝沢口の決戦に 降らす白刃の白虎隊

南望鶴城砲煙颯 痛哭飲涙且彷徨

宗社亡今我事畢 十有九人屠腹僵
飯盛山の秋深く 松嶺肌に寒けれど
忠烈とわに名を残す 花も会津の白虎隊
花も蕾の白虎隊

梅原旭壽会

筑前琵琶春の演奏会

三月十一日(日)正午京都商工会議所大ホールに於て京都琵琶協会後援のもとに首記が華々しく開催された。前夜からの雨もあがって今日は曇り空に終始し少々肌寒むの感じであったが聴客の出足は順調で十一時半の開場を待ちかねて十数人が入場、二時頃には広い会場もほぼ満員の盛況を呈した。演奏は旭壽会員七人に続いて会主、それから来賓六氏の熱演で完全に聴客を魅了して四時半終演、記念撮影のあと地下のレストランで関係者一同乾盃して本日の成功を祝し夕食を喫して目出たく散会した。

大高源吾一渡辺旭寿▼常陸丸一高田旭章▼加羅の兜一村山旭燿▼堅田落一清水旭翠▼小栗栖一岡本旭村▼安宅の関一山崎旭栄▼衣川一国友旭香▼新撰組一会主梅原旭壽▼(以下来賓)勿来の関一楊嶽水▼河内の宿一馬場鴨

水▼井伊大老一矢吹旭美津▼本能寺一平井春嶺▼菊水の旗一三浦蓮水▼曲垣平九郎一山崎旭萃。

錦心流一水会京都支部例会

二月十八日(日)昼一時から京都東山仁王門前の本妙寺で開催。本年初の例会が会場や日時の都合で延び延びとなっていたもので馬場鴨水支部長をはじめ早川幾水、多賀帯水、牧南水、木下皇水、会友田中敷水各支部員の外京都琵琶協会から梅原旭壽、山岡旭清、荒木旭媛、桜井旭富、平井春嶺、神戸番匠渚水、伊達諸氏及植村實水が列席して肩の凝らない楽しい半日を過ごして夕刻乾盃小宴、七時散会した。当日の演奏は山岡一扇の的▼田中一勿来の関▼多賀一詩吟非行少年の母▼木下一竜の口▼牧一本能寺▼早川一山科の別れ▼馬場一河内の宿▼番匠一勸進帳▼平井一東郷平八郎▼植村一横笛の以上であった。

日本芸術琵琶普絃会二月例会

二月十八日(日)昼一時東京文京区大塚の貸席京屋にて開催。門琵琶。お江戸日本橋。伴流謡切第七弾法一錦幽を序奏に川中島一内田隆章▼七卿落一坂入俊風▼城山一曰比錦媛▼西郷隆盛一原田旭鳳▼旅順開城一田戸桜丸▼薄陽江一高田栄水▼敦盛一若宮旭登▼黒田武士一山崎錦幽▼修善寺物語一杉山旗水。以上演奏のあと小宴、七時解散した。